

京都大学	博士（文学）	氏名	山下 大輔
論文題目	フランツ・カフカの動物物語における〈語り〉の視点について		
（論文内容の要旨） 本研究は、フランツ・カフカ（1883～1924）の物語における「語りの視点（Erzähl-Perspektive）」について、特に語りの人称という観点から論じる。先行研究の中で、おそらく今日までもっとも多く参照され影響力をもっているのはフリードリヒ・バイスナー（1905～1977）のカフカ論Der Erzähler Franz Kafka（物語作者フランツ・カフカ）であろう。本来であれば、一人称の「私」視点の語りに比べて、三人称視点の語りにおいては、語り手と語られる主人公の間に認知のレベルで隔たりが生まれるはずである。バイスナーによると、カフカの物語においてはそれが当てはまらない。カフカの語り手は主人公の「内面から語る」のであり、三人称であっても、語り手と主人公の間に距離がなく、両者は同一化している。たとえばバイスナーは、『変身』においては「語り手が、一瞬たりとも、主人公の心理的な連関の隘路から離れない」のであり、グレーゴルは「語り手にとっても、したがって読者にとっても、一匹の不気味な虫に変身している」と論じる。また、動物物語の代表としてあげられる『巢穴』においても、読者は「叙述の我意性（Einsinnigkeit）を極めて愉快地に経験することができる」と述べている。そして彼は、このような物語においては、メタ的な視点からの語りが存在しないため、読者が物語の世界に「縛り付けられる」のだと指摘している。この、語り手（兼主人公）の視点を読者が共有するという仕組みの問題は、カフカ作品の語りの視点について考えるための出発点として重要である。たとえば、カフカの動物物語は、一人称の語りの視点を通して、語り手の認識能力の限界性が示される、という枠組みをもっている。そして、このような物語を読む際に読者は、語り手がおこなう語りを追うのであり、その意味において、語り手が提示する世界を追体験するといえるだろう。ただし、それと同時にカフカはまた、いくつかの物語においては、読者の物語世界への同一化を阻むような微妙な違和感を注意深く物語に書き込んでもいる。本稿の目的は、このような語りの人称の表現が、カフカの個々の物語の内容と不可分に結びついているあり方を明らかにすることにある。そのために要求されるのは、考察対象とする物語における語りの人称についての検討を踏まえたうえで、いわゆる物語論的な議論に限定することなく内容に即して物語を論じていくという工程である。そのようなプロセスを通してこそ、叙述表現が生み出す物語内容的な主題と向き合うことができる。あらかじめ確認しておくならば、カフカの物語において語りの人称は、語り手が、語る状況や語る内容—それは自己の経験や、あるいは他者への評価などである—と対峙する、その多様なあり方をあらわしているといえる。そして、			

それを表現しているのは、たとえば、語りの人称が特定の場面においてman視点に転換されるという微妙な人称の揺らぎである。このman視点の導入は、主体が何かから逃れたいという切実な願望のあらわれである。これらを明らかにすることによって、先行研究がこれまで検討してきたカフカの人称論に新たな側面からの考察を加えたい。

第一章では、カフカの初期から中期にかけての草稿および作品について検討する。まず、初期の草稿である「田舎の婚礼準備」では、物語の中で、man視点によって語ることで、語り手が自身の発言内容について責任を負うことを避けられるという効果が直接言及されている。そしてそれは、結婚を目前に控えて、夫という社会的な立場を引き受けることを躊躇するという、語り手の心理状態と密接に結びついている。つまりこの物語では、叙述表現の面および内容面から、責任を逃れようとする主体の振る舞いが描き出されているといえる。ここに、カフカが創作活動初期においてすでに、語りの視点に関してきわめて自覚的に試行錯誤をおこなっていたことが明らかになる。また、『突然の散歩』においては、夜の散歩へと踏み出すことを決心できない人物の不安な心情がman視点を通して語られ、『変身』では、虫へと変身してしまったグレーゴルが、働きに出ることができなくなってしまった自身の状態を「ひと（man）」は短期的に能力を失っているが、と自らの状態を一般化して語る。このように、カフカの初期から中期にかけてのテキストにおいては、多様なかたちでman視点が物語の中に取り入れられている。ここで確認されるのは、実際には特定の個人の視点に基づいた状況や認識を描き出しているにもかかわらず、それをman視点によって一般的、普遍的に通用する事柄として提示する語りの技法である。

第二章では、中期の中編小説『あるアカデミーへの報告』をあつかう。この作品では、主人公兼語り手の猿であるロートペーターが、自身の人間社会への参入の歩みを一人称の「私」視点で語る。本作では前章で検討したような語りの視点のmanへの置き換えは見られず、また後期の動物物語「ある犬の探究」など他の動物物語と比べても、ロートペーターの語りは安定しているように見える。「ある犬の探究」においては、語り手が過去の衝撃的な体験を語る際に、その体験を自らの過去に属するものとして語ることが困難になり、語りの視点が「私」からmanへと変更される。対して、ロートペーターは、『あるアカデミーへの報告』の結末部分で自身の語る内容があくまで私的な「報告にすぎない」ことを強調しており、このような冷静さが、彼の語りに安定性をもたらしているとみることができる。他方で、その自己認識においては、ロートペーターは、自身が猿でなくなっただと考えており、自己欺瞞的な報告をおこなう。もっとも、外的な事象や他者については冷静に語ることはできる主体が、自らのあり方について誤解しているという状況はなんら特別ではなく、一般的だといえる。語り手が自らの主観性を自認できるということは、その語りの主体が全面的に客観的

であることを示してはいない。ロートペーターの語りにおいては、異なるレベルの認識が並存しており、そこには、人間の判断を等閑視すると宣言しつつも、人間社会への参入を「進歩」であると嬉々として語るような二律背反的な発言が多くみられる。それは、この物語の皮肉な滑稽さを生み出している。

第三章では、カフカの動物物語における人称論が持つ意味的な位置付けを確認するため、前章までの検討により明らかになった、語り手の認識の不安定性という主題について当時の動物論的な観点から論じる。具体的には、晩年の動物物語「ある犬の探究」の主人公である学者犬の認識能力の描写を、当時の生物学的な知見や動物物語、認識論的な観点を踏まえ検討する。19世紀後半から20世紀前半においては、生物学者ユクスキュルの、動物の環世界研究に代表される、動物の知覚に関する研究が活発におこなわれた。また、文学においても、ライナー・マリア・リルケの『ドゥイノ悲歌』（1922）やフェーリクス・ザルテンの『バンビ 森の生活の物語』（1922）にみられるような、動物の目線から人間を描くことで両者の世界を比較する手法が流行していた。これらに対して、「ある犬の探究」は犬の視点から語るという構造にこだわり抜かれて書かれている。たとえば、この物語の中には人間が登場しないが、これは、人間の存在を知覚できないという学者犬の知覚能力を反映している。また、学者犬は知覚能力が限定付けられている一方で、犬族の職業や記憶、食料といった問題について考察し、また民族の掟の明証性を括弧入れして吟味する思考能力をもっている。「ある犬の探究」は、主人公が「私」視点によって自らの探究人生について回想しながら語る自伝形式であり、そのため物語世界が主人公の内的省察と重なり合う構造となっている。そこでは、自然的な知覚能力とメタレベルの思考の並存が生み出す不安定な認識の世界が描かれている。

第四章では、「ある犬の探究」と同じく晩年の動物物語である「巣穴」について論じる。「巣穴」はカフカの物語の中でも、語りの視点という観点で多く論じられてきた物語といえるが、そこで分析の対象とされるのは、語りの視点の時間的な側面である。本章では時間論的な観点も考慮しながら、ここまでおこなってきた検討を踏まえて語りの人称について考察する。「巣穴」は「私」形式によって語られる一人称視点の物語だが、前半部と後半部において、「私」ではなくman視点の語りが採用されている。第二章で「ある犬の探究」におけるman視点について確認したが、カフカは「巣穴」においても精神的な危機のあらわれとしてのman視点を用いている。加えて、この物語では、物語の前半部と後半部で「私」が姿の见えない「敵」からの攻撃を想像する場面において二度にわたってman視点が集中的に用いられる。また、両者を比較すると、このman視点は単に二度用いられているのではなく、それぞれの場面で語り手が感じる恐怖の度合いに応じて描き分けられていることが明らかになる。まず物語の前半部では、主人公が、自身が巣穴の中で「敵」に襲われる状況を仮想的に

想像する場面でman視点の語りがおこなわれる。ここで着目しておくべきことは、man視点による語りが早々に終わり、すぐにまたichが主語として復権する点である。これは、この時点では語り手が、恐怖心を抱きつつもまだ比較的に精神の安定を保つことができていることをあらわしている。これに対して、物語の後半でのman視点は、「私」が敵の接近を感じ、今にも自身が襲われるという危機感をもって想像する際に導入される。この場面では、突然のman視点への転換に読者は違和感を覚えるのだが、それにくわえてこの視点からの語りはこれ以降きわめて長大な範囲におよぶ。それは実に、本稿が依拠する批判版全集において3ページ（407語の範囲）にわたっており、これが読者に一層異様な印象を与えるのである。この物語では、はじめのman視点は控えめに、そして二か所目に関してはより広範囲にわたって展開することで、後者のman視点の効果をより強調しているといえるのだ。「巣穴」において「私」は、物語の前半では「敵」の恐怖におびえながらも外の世界と巣穴を往復し、その運動の中で自己について省察することにある種の喜びを見出している。しかしながら、物語の後半部では、そのような余裕はなくなり、徐々に思考内容は敵の存在に対する不安に満たされていく。そして、それ以降「私」の語る内容は支離滅裂な性格を強め、その思考は巣穴の構造と同様に迷宮化していくことになる。語り手が状況を正しく把握できないという認識能力の限定性の問題は、『あるアカデミーへの報告』や「ある犬の探究」にも共通している。動物物語においてカフカは知覚と認識の問題に取り組んできたと言えるが、「巣穴」は認識論的な観点を含む動物物語の最終形といえる。

第五章では、カフカの最後の執筆作である『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』における語りの仕組みを分析する。前章までに言及したカフカの動物物語と同じく、本作の語り手も「私」の視点から語る一人称の語り手である。しかしながら、先の3つの物語とは、語り手と、語る内容の位置関係が大きく異なっている。前者の内容はいずれも、語り手が自らの歩みについて回想し、考察するというものであった。これに対して本作では、物語の主題となる歌姫ヨゼフィーネではなく、大衆の側に身を置く一匹のネズミが語り手の役割を担っている。いわば、一般的なネズミである「私」の視線を通して芸術家の姿が描き出されるのだ。この物語の語り手のあり方について論じる先行研究として、ゾーケルは、本作がカフカ作品においては珍しい、多数派、権力側の立場から語られる物語だと指摘している。また、パスカルは、語り手の「私」がヨゼフィーネとネズミ族一般のどちらか一方に極端に肩入れすることのない報告を行うことに着目し、中立的な存在だと述べているのだ。客観的で信頼できる語り手であり、内面をもたない透明な「媒介」だと結論する。しかしながら、「私」が語る内容を検討すると、一見公正な媒介者を装う語り手「私」が、実際にはヨゼフィーネの歌唱の意義深さを強調するという動機に基づいて、語りの技法を駆使していること浮かび上がってくる。それは、対象の美点を直接的に主張するのではなく、前

もって一度その否定的な評価を提示しておき、そのうえでそれを乗り越えさせるという迂回路を経ることによって、より一層肯定的な価値付けを強化する、という語りの方法論である。たとえば、この観点を踏まえて冒頭のヨゼフィーネへの賛辞の直後に置かれた留保、その歌唱は実際には「何ら傑出したものではない」という「私」のコメントについて検討すると、これも同様の効果を狙っていることがわかる。芸術としては特別優れた点を備えていないにもかかわらず、それでも聴くものを惹きつける歌唱、という見せ方を通して「私」は、逆説的に歌唱がネズミ族に対してもつ影響力の大きさを強調している。そして、『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』ではこのような印象付ける語りが物語を通して繰り返し行われる。加えて、この作品は一人称視点の物語ではあるが、実際には語り手の「私」は作中の大部分において「私たち（wir）」視点からの語りをおこなっており、これは発言内容の信憑性を高める狙いにもとづいている。カフカは晩年の数編の動物物語の中で、語りの仕組みを通して、「私」の語り手たちが提示する内容に含まれる破綻や矛盾を示すことで、主体の認識能力が限界づけられたものであることを描きだしていた。それに対して本作に見出されるのは、ヨゼフィーネとネズミ族の共同体の間での、承認をめぐるすれ違いである。「私」が明らかにしているように、ヨゼフィーネは歌姫としてネズミ族の共同体に存在することを承認されていた。ただし、これは歌唱の芸術性を評価されてのものではなく、ゆえにヨゼフィーネにとっては無効な承認である。芸術家であるヨゼフィーネの存在はネズミ族にとって唯一無二ではあるにせよ、結局のところ、それにどのような意味づけをおこなうかはネズミ族の側に一任されているといえる。本作は、語りの視点をヨゼフィーネの外部に置くことで、このような芸術家と社会の間の解決し得ない非対称性を浮き彫りにしている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ナラトロジー（物語論）の手法でカフカ文学を分析したものである。この研究手法は、英語圏やドイツ語圏のカフカ研究において高度に発達を遂げているのに対し、日本のそれにおいては従来まったくと言っていいほど追求されてこなかった。したがって、本論文が正面からこの研究課題に取り組んでいること自体、特筆すべきである。ただし本論文は、欧米の数多い物語論的カフカ研究文献を渉猟しながら自らの研究の視座にたどり着いたものではなく、「語りの視点」の問題に特化し、いわば一点突破を図ったものである。その意味では広がりには欠ける面があるものの、その分、問題設定の輪郭ははっきりしている。

本論文の出発点に置かれているのは、カフカ文学においては語りの視点と主人公の視点が原則的に一致している、というフリードリヒ・バイスナーの指摘である。それによると、カフカ文学は、たとえ三人称形式で書かれている場合でも主人公の視点に徹底的に寄り添うことによって独特の視野狭窄の感覚を生み出し、主人公のあくまで主観的な世界を首尾一貫して表現することに成功している。このバイスナーの主張は研究史上、大きな影響力をふるったが、カフカ文学の語り手の諸相を分析したロイ・パスカルらによる検証の結果、実際には、カフカ文学がそこまで首尾一貫して主人公の視点からのみ語られているわけではなく、視点の揺らぎや不統一が多々あることが明らかにされている。そのため、今日ではバイスナーの説はもはや過去のものとして扱われることが多いが、本論文はあえて彼の議論に立ち戻り、彼の言う「語りの視点＝主人公の視点」の原則がよく当てはまるカフカのテキストを分析対象に選びながら、そこに含まれるさらに微細な視点の揺らぎを取り出そうとする。

その際に本論文が手がかりとするのは、語りの人称の問題である。従来の研究でも、カフカ文学においては一人称のich（私）を用いた記述と三人称のer（彼）を用いた記述に互換性があり、等価的であることは指摘されてきた。それに対して本論文は、不定代名詞man（ひと）を用いた記述に着目する点に特徴がある。これは、誰のこととは特定せずに一般的な事柄を述べる際に用いられる言葉で、主語となった場合に動詞は三人称単数の変化をする。同様の表現は他のヨーロッパ言語にも見られるが、この語の使用頻度の高さ自体がドイツ語という言語の個性となっている（哲学者ハイデガーは、この言葉を普通名詞化したdas Manを、人間としての本来のあり方に無自覚にぼんやり生きている人間という意味で用いた）。本論文は、カフカが一人称でも三人称でもなく、このmanを使って書いている局面に光を当てるのである。

本論文の第一章「初期から中期におけるman視点の語り」では、カフカ最初期の断片「田舎の婚礼準備」を範例として、カフカがどのようなタイミングでerからmanへと移行しているかが定式化される。それによると、カフカは基本的に主人公ラバーンの内面に寄り添いつつ書いているが、主人公が結婚へのためらいと忌避感を覚えるときにerからmanへの移行が生じているのだという。すなわち、主人公が自らの社会的責任から逃避したいと願う際に、その逃避願望が、あたかも特定の個人の話ではなく一般

論が語られているかのような形式を要求するのである。さらに、この断片の中には、**ich**の代わりに**man**と言うことで自分にとって苦痛なできごとが語りやすくなるという効能について述べられている箇所がある。つまり、カフカは**man**の効能について自覚的であり、その点を自作中で表明しつつ、さらには実際にその効能を試しているのである。そして「田舎の婚礼準備」以外のテキストについても、同様の**man**の使い方が見て取れるという。この指摘はきわめて興味深い。ここで得られた知見を足がかりに、本論文は、カフカの一人称形式の動物物語がどのように語られているかを作品横断的に論じていく。

本論文の第二章で扱われる『あるアカデミーへの報告』は、人間の言語を獲得した猿の語りという体裁の物語である。そこでは**ich**から**man**への移行は見られず、カフカ作品としては例外的に、視点の揺らぎが存在しない。その安定ぶりが、人間と対等な存在になったと勘違いしている猿の主観性の滑稽さを浮き彫りにしているのだという。第三章で扱われる断片「ある犬の探求」では、それとは対照的に、**man**が多用されている。語り手の学者犬は、自分が理解できない現象に遭遇した際、その衝撃から逃れるための一種の自己防衛として、**man**を用いた語りへと移行する。その姿には、同時代の哲学・思想で話題になっていた、人間および動物の認識能力（の限界）というテーマが投影されているとされる。第四章で扱われる最晩年の断片「巣穴」では、精神的な危機とそれに対する自己防衛を表現する手段としての**man**の使用はさらに洗練され、深化を遂げており、これによって、語り手のモグラとおぼしき動物の置かれた不安定な立場が浮き彫りになる。第五章では、一つの民族集団内で芸術家が果たす役割というテーマを描いた短編『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』において、**ich**に加えて一人称複数の**wir**（我々）の視点が導入されていることの意味が論じられている。以上の分析により、同じ一人称形式でもカフカの語りに非常に繊細な揺らぎが見られること、その揺らぎがそのつどの作品テーマと噛み合うことでカフカ文学の多様性が生まれていることが確認された。

むろん、本論文にもさらに望まれる点がないわけではない。物語論的なアプローチと、これが作品のテーマだとして取り出されているものの接合が必ずしもうまくいっていない印象があり、特に第三章で扱われている哲学的・思想的なトピックは、取り上げる必然性が薄いように感じられる。分析対象を動物物語に絞った理由も必ずしも明確ではない。とはいえ、それらの点は、物語論的な方向からカフカ研究に対して新たな寄与を行った本論文の中心的な価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和7年2月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。